

ユーザーレポート User Report

ゼロ
0の証明

個人

壊れかけた日常を繋ぎ止めた、20秒の「誓い」

今回の取材では、利用者ご本人である岡村さん(仮名・61歳)から直接お話を伺うことができました。通常、デリケートな背景を持つ当事者の方からお話を伺うことは容易ではありませんが、岡村さんは自らの過ちや苦しい過去、そして今抱えている葛藤を、驚くほど赤裸々に、そして誠実に語ってくださいました。そこには、過去を隠すのではなく、すべてを受け入れて前を向こうとするひとりの男性の、強い決意が滲んでいました。鹿児島県ののどかな風景の中、一台の乗用車が止まっています。運転席に座る岡村さんが手にするのは、アルコールインターロック装置。大きく息を吹き込むその20秒間は、彼が「自分自身」と「家族の信頼」を取り戻すための、静かな、しかし重みのある儀式です。

ご利用機器

カメラ付き
アルコールインターロック装置

ALC-ZERO II



当事者の葛藤

～酒に飲み込まれていく恐怖と悔しさ～

「自分では軽い方だと思っていた。でも、体は嘘をつけなかった」長年、製造現場で重労働に励んできた岡村さんにとって、一日の終わりの芋焼酎は何よりの楽しみでした。3～4年前の当時は純粋に酒席を楽しんでいましたが、一度飲み始めると適量を制御できず、一升瓶を3日で空け、食事も摂らずに飲み続けてしまう危うさを抱えていました。転機となったのは、その時期に経験した吐血による長期入院です。この時、病院から依存症回復プログラムへの参加を求められましたが、岡村さんは「自分はそこまでひどくない」と強く反発。周囲との温度差に馴染めず、プログラムへの参加は苦痛以外の何物でもありませんでした。退院後、職場復帰を果たすも環境の変化によるストレスが重なり、お酒の役割は次第に「楽しみ」から「不満をぶつける手段」へと変貌していきました。食事を疎かにして飲み続け、朝にお酒の臭いが残った状態で出社して周囲から指摘を受けることも珍しくありませんでした。



心の中には、自分をコントロールできない不安と、職場への強い鬱憤が渦巻いていきました。

昨年4月、その葛藤がついに爆発します。自宅で飲酒后、抑えられない感情のまま車を走らせ、職場で上司とトラブルを起こしてしまったのです。再入院となった精神科病棟でも、3～4年前と同様のプログラムが待っていましたが、依然として強い違和感を持ち続け、反省文の提出すら拒み続けた結果、入院期間は4ヶ月にも及びました。

「もう、後がない」。病室でひとり過ごす時間、岡村さんは自らの弱さと向き合い、絶望に近い悔しさを静かに噛み締めていました。

ご家族の想い

～突き放せない「父」への、祈るような愛情～

離れて暮らす息子さんにとって、父の異変は常に心の重荷でした。一時は食事も摂らず酒に溺れ、吐血して倒れた父。職場でトラブルを起こし、定年を目前に職を失いかけている父。しかし、息子さんは知っていました。本来の父は、真面目に働き、家族を想う本当に優しい人であることを。「これまでの辛い日々、家族として父をもっと支えられたのではないか」そんな後悔と、どうかして父を助け出したいという切実な願いが、息子さんを動かしました。息子さんは、父を突き放すのではなく、もう一度社会と繋ぎ止める道として、自ら必死に探し出した「アルコールインターロック」を手に、父の勤め先へと向かいました。会社側からも、復帰のための明確な条件が提示されました。「アルコールインターロックを装着し、二度と飲酒運転をしないことを前提として復帰を認める」という厳しい内容です。

もしこの提案がなければ、父は定年と同時に自主退職するしか道はありませんでした。それは息子さんから父への、厳格な最後通牒であると同時に、「もう一度、父さんとして胸を張って生きてほしい」という、祈りにも似た愛の証でもありました。息子さんは今、「離れて暮らしていても、装置があることで父が安全に働けていることがわかる。それだけで救われる思いです」と、安堵の表情を見せています。



ユーザーレポート

ゼロ
0の証明

個人

奥様の献身

～言葉にならない「守りたい」という願い～

一番近くで岡村さんの崩壊と再生を見てきたのは、奥様でした。血を吐いた夫を救急車で送り出し、精神科への入院中も、コロナ禍で面会すら叶わない孤独な時間を、ただ夫の回復を信じて待ち続けました。再雇用となった今、奥様は慣れない環境で働く夫を精神的にも肉体的にも支えています。夫の自尊心を傷つけないよう絶妙な距離で見守りながら、腰痛を抱えつつ重労働に励む姿を労い、食欲が戻り体重が増えたことを自分のことのように喜びます。

特に朝、アルコールインターロックが夫を守るための「壁」となる瞬間、奥様の献身的な支えが光ります。前夜の飲酒が遅くなり、装置でアルコールが検知されエンジンがかからない時や、数値が出ることを不安に思う朝、奥様は決して夫を責めることはありません。「今日は私が送るから大丈夫よ」と静かにハンドルを握り、職場まで送り届けます。それは、装置によって運転を阻止された夫を助け、会社との約束である「欠勤せず働くこと」を守るための、奥様なりの懸命なサポートです。「何としても、夫の平穏な日常と、ようやく手にした再雇用の道を繋ぎ止めたい」その静かで揺るぎない決意が、岡村さんの再出発の歩みを力強く支えています。

再生への歩み

～孫の誕生、そして65歳までの誓い～

現在、岡村さんは「20秒から40秒の測定時間」を毎朝クリアし、製造現場での日勤に従事しています。当初は「自分の意思でつけたのではない」という反発もありましたが、今ではこの装置が自分を律し、家族の信頼を守るための盾であることを深く理解しています。

この夏には、待望の初孫が生まれます。「65歳まで頑張りたい。孫にお小遣いもあげたいからね」と語る岡村さんは、お孫さんの誕生を心待ちにする喜びを隠しきれず、その目尻を下げて照れくさそうに笑います。長年寄り添ってくれた奥様や、救いの手を差し伸べてくれた息子さんに対して、面と向かって「ありがとう」と口にするのは、少し不器用な岡村さんにとってはまだ難しいことかもしれません。

しかし、取材の中で家族の絆やこれからの生活について語るその口調は、驚くほど穏やかで優しさに満ちていました。自らの過去を赤裸々に語り、今の歩みを一歩ずつ踏みしめるその姿には、もう迷いはありません。一台のデバイスが、ひとりの男性の尊厳と、ひとつの家族の未来を、今日もしっかりと守り続けています。



※文章、写真の無断転載や抜粋、加工は固くお断りいたします。

編集後記

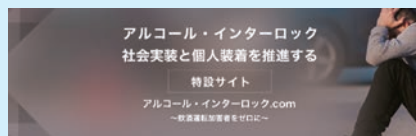
不器用な「守りたい」という意志

「お酒はやめられない」岡村さんは自らの弱さを隠さず、そう語りました。一時は命の危険にさらされ、仕事や信頼を失いかけた過去があってもなお、「酒が好きだ」と言い切る姿は危うくも人間味に溢れています。しかしその裏には、「家族にだけは二度と迷惑をかけたくない」という切実な想いが張り付いています。精神論だけでは制御できない依存症という病に対し、彼は「機械の力」を借りて飲酒運転を物理的に断つ道を選びました。「完全にやめてほしい」と願いつつも、それが容易ではない現実に葛藤するご家族は少なくありません。岡村さんのご家族も、葛藤の末に「父の居場所を守る」ため、この選択を受け入れました。お孫さんのために不器用に踏みとどまるその背中が、同じ悩みを持つ誰かにとっての現実的な救いとなることを願っています。



取材ご協力

家族を守る方法の手段として、
アルコール・インターロックを導入された
岡村さん(仮名)ご一家



東海電子WEBサイト
【アルコール・インターロック.com】
<https://alcohol-interlock.com/>

LINE 公式アカウント

@700xyfip

大切な人の飲酒運転で
悩まれていたら…
いつでも LINE で
ご相談ください!

